

趙師秀の五言律詩「雁蕩宝冠寺」及び「薛氏瓜廬」について

三野 豊浩

〔要旨〕

趙師秀は、南宋後半期に活躍した「永嘉の四靈」の中で、最も評価の高い詩人である。永嘉の四靈は賈島・姚合に学び、五言律詩の創作に心血を注いだことで知られるが、日本では、その作品が紹介される機会はあまり多くない。そこで本稿では、趙師秀の代表作として知られる二首の五言律詩「雁蕩宝冠寺」と「薛氏瓜廬」を紹介し、詳しく解説した。

まず「雁蕩宝冠寺」は、永嘉の名勝として知られる雁蕩山の宝冠寺を訪れた際の感慨をうたう。山頂に池があり、ここに渡り鳥の雁が逗留することから雁蕩と名づけられたという。次に「薛氏瓜廬」は、会昌湖のほとりにある薛師石の瓜廬を訪れた際の感慨をうたう。薛師石は今日ではほとんど顧みられないことのない江湖派の小詩人であるが、当時においては相当な詩名が

あり、趙師秀をはじめ永嘉の四靈と交友があった。これらの詩は、いずれも『瀛奎律髓』『宋詩鈔』『宋詩紀事』及び『宋詩精華録』に収録されている。

〔キーワード〕 中国古典文学 宋詩 南宋 永嘉の四靈 趙師秀 五言律詩 雁蕩山 宝冠寺 薛師石 瓜廬

はじめに

趙師秀（一一七〇～一二二九）、字は紫芝。号は靈秀、または天樂。永嘉（浙江省温州）の人。南宋後半期に活躍した「永嘉の四靈」（徐照、徐璣、翁卷、趙師秀）の末に名を連ねる人物であるが、その実、四人の中では最も評価が高い。元・方回『瀛奎律髓』は、卷三十五「庭宇類」所収の趙師秀の五言律詩「桃

花寺」に対する評語の中で、「四霊詩、趙紫芝為冠〔四霊の詩は、趙紫芝を冠と為す〕」と述べている。趙師秀は宋の王族で、太祖趙匡胤の八世の孫にあたる。¹⁾ 原籍は汴京（河南省開封）で、後に永嘉に居を移した。光宗の紹熙元年（一一九〇）に進士となり、上元（江蘇省江寧）主簿、金陵（江蘇省南京）幕從事、筠州（江西省高安）推官などの小官を歴任し、晩年は錢塘（浙江省杭州）に寓居した。寧宗の嘉定十二年（一一二九）に世を去り、西湖のほとりに葬られた。その詩集を『清苑齋集』という。趙師秀の作品は『全宋詩』では卷二八四一〜卷二八四二（第五十四冊）に収録されており、合計一六一首と句九つを数える。清・呉之振等『宋詩鈔』の『清苑齋詩鈔』は、そのうち一一三首を収録している。

永嘉の四霊は、晩唐の賈島・姚合に学び、特に五言律詩の創作に心血を注いだことで知られるが、日本では、その作品が紹介される機会はあまり多くない。そこで本稿では、四霊の冠と目される趙師秀の五言律詩のうち、最も代表的な作品と考えられる『雁蕩宝冠寺』『薛氏瓜廬』の二首を紹介することにした。本稿以前に、『雁蕩宝冠寺』は前野直彬編『宋詩鑑賞辞典』（一九七七年九月、東京堂出版。中島敏夫氏執筆担当）に、『薛氏瓜廬』は小川環樹『宋詩選』（一九六七年三月、筑摩書房）に、それぞれ収録され解説されている。本稿はこれらを参考としつつも、さらに踏み込んだ読解を目指した。執筆にあたっては『宋詩鈔』所収の『清苑齋詩鈔』を底本とし、他のテキストと比較

して異同のある場合は、その旨記した。字体は新字体で、送り仮名は新仮名遣いで表記した。また、口語訳に際して、原詩原文にない言葉を補った場合は、「」に入れて示した。

一、「雁蕩宝冠寺」について

まず、「雁蕩宝冠寺〔雁蕩の宝冠寺〕」を紹介する。この詩は『宋詩鈔』の『清苑齋詩鈔』の他、『瀛奎律髓』卷四十七「釈梵類」、清・厲鶚『宋詩紀事』卷八十五、清末〜民国・陳衍『宋詩精華録』卷四及び『全宋詩』卷二八四一に収録されている。ただし、宋詩の代表的な選集であっても、清・張景星他『宋詩別裁集』及び錢鍾書『宋詩選注』には収録されていない。²⁾ 韻字は偶数句末の「云」「雲」「分」「聞」で、韻の種類は上平声十二・文韻である。

○●●○○

行向石欄立 行きて石欄に立てば

○○●●○

清寒不可云 清寒なること 云うべからず

○○○○●●

流来橋下水 流れ来たる橋下の水

●●●○○

半是洞中雲 半ばは是れ洞中の雲なり

●●○○●●
欲住逢年尽 住まんと欲するも 年の尽くるに逢い

○○●●○○
因吟過夜分 吟ずるに因りて 夜分を過ぐ

●●○○●●
蕩陰当絶頂 蕩陰 絶頂に当たるも

●●●●○○
一雁未曾聞 一雁も未だ曾て聞かず

《雁蕩山の宝冠寺》

〔高い山の上にある〕石の欄干に歩み寄り、立って〔眼下の風景を眺めて〕みれば、その寒さは何とも言えないほどである。〔滔々と〕橋の下まで流れて来る〔滝の〕水、その半ばは、〔もとは〕洞窟の中の雲であつたのだ。

〔このまま、この山にとどまつて〕住んでみたいと思うが、ちやうど二年の終わりを迎える時期に出くわし、〔詩を夢中になつて〕吟じていたために、真夜中を過ぎてしまった。蕩陰〔の池〕は〔雁蕩山の〕山頂にあたるが、〔どうしたわけか〕たった一羽の雁〔の鳴く声〕も、〔私は〕まだ耳にしていない。

最初に、詩題の「雁蕩宝冠寺」について。「雁蕩」は、雁蕩山。略して雁山ともいい、『宋詩紀事』は詩題を「雁山宝冠寺」とする。同山は今日でも浙江省の有名な観光地であり、古くは北

宋・沈括（一〇三一〜一〇九五）の『夢溪筆談』巻二十四「雜志一」に詳細な記述がある。次にその一節を示す。

温州雁蕩山、天下奇秀、然自古凶牒未嘗有言者。祥符中、因造玉清宫、伐山取材、方有人見之。此時尚未有名。按西域書、阿羅漢諾矩羅居震旦東南大海際雁蕩山芙蓉峰龍湫。唐僧貫休為「諾矩羅贊」、有「雁蕩經行雲漠漠、龍湫宴坐雨濛濛」之句。此山南有芙蓉峰、下芙蓉峽、前瞰大海。然未知雁蕩龍湫所在。後因伐木、始見此山。山頂有大池、相伝以為雁蕩。下有二潭水、以為龍湫。（中略）謝靈運為永嘉守、凡永嘉山水、遊歷殆尽、独不言此山、蓋當時未有雁蕩之名。

温州の雁蕩山は、天下の奇勝である。しかしながら、昔から地図や記録でこれに言及した者はなかった。〔北宋の〕大中祥符年間（一〇〇八〜一〇一六）に、玉清宮を造営するために山から材木を伐採し、はじめて人がこれを目にしたが、この時はまだ名を知られてはいなかった。⁽³⁾西域の書物によれば、阿羅漢のナクラ（十六羅漢の一人）が、中国の東南、大海のほとりにある雁蕩山芙蓉峰の龍湫に住んでいた、とある。唐の僧の貫休が「ナクラ贊」を作り、「その中に」「雁蕩經行すれば 雲 漠漠、龍湫 宴坐すれば 雨 濛濛」という句がある。この山の南には芙蓉峰があり、その下には芙蓉峽があり、前方に大海を見おろす。しかしながら、〔當時は〕まだ雁蕩と龍湫の所在がわからなかった。後に、材木を伐採

したことによって、始めてこの山を発見したのである。「雁蕩山の」山頂には大きな池があり、雁が逗留する場所であると言いつたに伝えている。その下に二つの深い淵があり、龍が棲む滝であるとされる。(中略)〔南朝宋の〕謝靈運が永嘉の太守となり、永嘉の山水はほとんどすべて遊覧しているが、ただこの山のことだけは語っていない。おそらく、当時はまだ「雁蕩」という名称がなかったであろう。

時代が下つて、清・顧祖禹『讀史方輿紀要』卷九十四「浙江六」は、雁蕩山を次のように解説している。

雁蕩山、泉東九十里。岩巒盤曲凡数百里、其峰百有二、谷十、洞八、岩三十、争奇競勝、遊歷難遍。志云、山跨樂清平陽二県、在平陽西南者曰南雁蕩、此為北雁蕩。群峰峭拔、上聳千尺、皆包谷中、自嶺外望之、都無所見、至谷中則森然干霄。有大小龍湫会諸溪澗水、懸岩数百丈、飛瀑之勢、如傾万斛水從天而下也。絶頂有湖、方十余里、水常不涸、雁之春栖者留宿焉、故曰雁蕩。(中略)沈括謂天下奇秀無逾此山也。

雁蕩山は、「樂清」県の東、九十里の所にある。岩山がうねうねと続くことおよそ数百里、その峰は百二、谷は十、洞窟は八、巨岩は三十もあり、奇観を競い合つていて、あまねく遊覧するのは難しい。地理志には、次のようにある。山は樂清と平陽の二県にまたがり、平陽の西南にあるものを南雁

蕩といい、こちら「樂清」側にあるのが北雁蕩である。数多くの峰がけわしく切り立ち、千尺もの高さにそびえ、いずれも谷の中に包まれている。外側からこれを眺めると、まったく何も見えないが、谷の中に入ると、鬱蒼として雲の上まで突き抜けている。大小の滝があり、諸々の溪流や谷川の水を集め、岩に懸かること数百丈、流れ落ちる滝の勢いは、あたかも万斛の水を天上から注ぎ落としかのようである。山頂に湖があり、十余里四方で、水は常に涸れることなく、春に〔北に〕帰る雁がここに逗留するので、雁蕩という。(中略)沈括は、天下の奇勝はこの山にまさるものはないと言っている。

「浙江省交通旅遊図」(一九九九年、湖南地圖出版社発行)を見ると、現在でも温州の一带には「北雁蕩山」「中雁蕩山」「南雁蕩山」の三つが確認できる。これらは古来「東甌三雁」と称され、中でも北雁蕩山が絶景であるという。趙師秀がうたっているのも、この北雁蕩山である。同山には十八の古刹があり、「宝冠寺」はその一つである⁽⁴⁾。

以下、詩の内容を聯ごとに解説する。まず、首聯「行向石欄立、清寒不可云」について。「向」は「於」に同じ。古くからある用法で、平仄の關係で文字を置き換えたものである。一例として、清・嚴長明『千首宋人絶句』卷一に収録されている趙師秀の七言絶句「池上」⁽⁵⁾の前半は、次のようにうたう。

○○○○●○○○

朝来行薬向秋池 朝来 秋池に行薬するに

●○○○●●○○

池上秋深病不知 池上 秋深きこと 病みて知らず

この詩の場合、仮に「向(●)」を「於(○)」にすると、第一句は末尾に平字が三つ並ぶ「下三連」となり、近体詩の格律における禁則を犯すことになってしまふ。一方「雁蕩宝冠寺」の「行向石欄立(○○●●○○)」の場合は、五言における「二四不同」を成り立たせる必要から、「於」のかわりに「向」を用いたと考えられる。作者は石の欄干に歩み寄り、眼前に広がる雄大な風景を眺めている。すると、その寒さは何とも言いようがない。第二句「清寒不可云」について、中島敏夫氏は『宋詩鑑賞辞典』で次のように解説している。

この句の表現は、詩法上禁忌そのものの表現ともいえる。(中略) 何ともいい表しようのないことを、表現してみせようとするところに詩が詩として成立するはずである。しかしここでは、その禁忌が敢て犯かされる。おそらく意識的である。「決して情念を直叙しない」といわれる黄庭堅、江西詩派には、こうした表現は考えられない。反江西詩派の立場を貫く四霊の立場がそこにある。しかしその敢ておかしな禁忌は見事に成功したといえる。成功の原因はまず日常的な言葉をそ

のまま使ってみせたという点にある。(中略) 第二には、この句が、次の一聯、秀れた領聯の前に来ているということである。(中略) 幻想的なその動画は「清寒」の中でこそ生きてくる。

まさに、典故の使用を極力排除し、「白描」に徹することを目指した四霊の真骨頂といった所であろうか。

次に、領聯「流来橋下水、半是洞中雲」について。眼下に見おろす橋の下を流れている水。もとをただせばその半ばは、洞窟の中からわき出た雲が姿を変えたものに違いない。この二句はこの詩の肝腎であり、古来多くの文人が論評している。たとえば、南宋・魏慶之『詩人玉屑』巻十九に引かれる南宋・黄昇の『玉林詩話』は、この二句が晩唐・于武陵の五言律詩「贈王隱人(王隱人に贈る)」(『全唐詩』巻五九五)の「飛来南浦水、半是華山雲(飛び来たる南浦の水、半ばは是れ華山の雲なり)」にもとづくものであると指摘し、また方回『瀛奎律髓』は、この二句と晩唐・杜荀鶴の五言律詩「訪道者不遇(道者を訪ぬるも遇わず)」(『全唐詩』巻六九二)の領聯「祇応松上鶴、便是洞中人(祇だ応に松上の鶴、便是れ洞中の人なるべし)」との関連性を指摘している(7)。

一方、陳衍『宋詩精華録』は、この二句に「流来橋下水、半是洞中雲」と圈点を施し、「三四在四霊中、最為掉臂遊行之句(二、四は四霊の中に在りて、最も掉臂遊行の句なり)」と特筆

している。「掉臂」は、ひじをふるう、勢いよく腕を動かす、の意。したがって「掉臂遊行之句」とは、感興の赴くままにのびのびと書かれた句、ということであろう。四靈は「推敲」の故事で知られる賈島を規範として学んだだけに、一字一句を入念に彫琢するのが常であるが、この句の場合はそうした形跡がなく、即興的に書かれたように感じられる、というのである。これは一見、同じ詩句が晩唐の詩人の詩句を下敷きにしている、という魏慶之（黄昇）や方回の見解と相反するかのようであるが、趙師秀が晩唐の詩人たちの作品を深く研究し咀嚼した上で、即興的にこの二句を書いた、と考えれば、特に矛盾しない。趙師秀は『二妙集』（賈島・姚合の選集）及び『衆妙集』（その他の唐代詩人の選集）を編集しており、唐代ことに晩唐の詩に対して造詣が深かったことは紛れもない。『玉林詩話』も、詩句の類似を指摘した後で、次のように述べている。

蓋読唐詩既多、下筆自然相似、非踏襲也。其間又有青於藍者、識者自能辨之。

おそらくは唐詩を学ぶことが多いために、筆を下ろせば自然と似た（句ができあがった）のであり、「そのまま」踏襲したわけではないのであろう。その中にはまた藍よりも青いもの（もとの唐詩よりもすぐれたもの）があり、識者はおのずからこれを弁別することができる。

なお、『瀛奎律髓』及び『宋詩紀事』は、「半是」を「疑是」とする。この場合、「疑うらくは是れ洞中の雲かと」と訓読し、「洞窟の中の雲だったのではなからうか」という意味になる。

次に、頸聯「欲住逢年尽、因吟過夜分」について。『宋詩精華録』は、この二句に「欲住逢年尽、因吟過夜分」と傍点を施している。雄大な滝の風景が気に入り、ここに住んでみたいものだと思いが、一年が終わる時期に出くわし、また詩を吟じていたために時刻も真夜中を過ぎてしまった。現代人の感覚からすれば、そんなに山が気に入ったのなら、山で年を越せばよいではないか、と思う所だが、宋人の感覚からすれば、年越しはあくまでも自宅で行うべきものであろうか。「夜分」は「夜半」に同じ。趙師秀は、七言絶句「宿国清〔国清に宿る〕」でも、夜更けに寺院の中で苦吟する自分自身の姿をうたっている。参考までに次に示す。

残灯吹了閉禪関 残灯 吹き了して 禪関を閉ざれば

風約孤螢落砌間 風は孤螢を約して 砌間に落とす

本為飲茶妨睡早 本は茶を飲みしが為に睡りの早きことを妨げらるるも

強尋詩句擬寒山 強いて詩句を尋ね 寒山に擬す

国清寺は、臨安（浙江省杭州）城内にあった天台宗の寺院で、名僧寒山にゆかりがある。このように、名刹を訪ねて詩を作る

ことは、作者にとつて日常茶飯事であつたと思われる。

最後に、尾聯「蕩陰当絶頂、一雁未曾聞」について。『宋詩精華録』は、第八句に「一雁未曾聞」と傍点を施している。「蕩陰」は、雁蕩山の山頂にある池の名前。ここに雁が逗留するとは、すでに述べた。その池が作者のいる場所からどの程度の距離にあるのかわからないが、普段は聞こえるはずの雁の声、というわけがまったく聞こえない、というのである。ちなみに、永嘉の四霊の一人である徐照（？～一二二一）の五言律詩「宝冠寺」の頸聯は

空房人暫宿 空房 人 暫く宿り
半夜雁初聞 半夜 雁 初めて聞こゆ

とうたっているから、本当は雁はちゃんといるのである。あるいは徐照が雁蕩山に登つたのは趙師秀とは別の時期であつたかも知れないが、趙師秀の詩には「逢年尽」とあり、年を越す時期には越冬の雁はまだ南に滞在しているはずである。とすればこの結びは、実景を忠実にうたつたというよりも、本来ならば当然いるはずの雁が、なぜかそこにいない、とうたうことで、表現に意外性と興行きを持たせようとした可能性が考えられよう。たとえば、賈島の五言絶句「尋隠者不遇」(隠者を尋ぬるも遇わず)では、自宅にいるはずの隠者が山に葉を採りに出かけていて不在であることが、かえつて詩に余情を与えている。

趙師秀もこの律詩において、同様の効果を狙つたのではなからうか。この結尾はまた、北宋・王安石の七言絶句「鍾山即事」の後半

茅簷相對坐終日 茅簷に相対して坐すること終日
一鳥不鳴山更幽 一鳥 鳴かずして 山 更に幽なり

をも連想させる。鳥の声がしないことが、一層山の奥深さを感じさせるのである。第八句、『宋詩紀事』は「未曾聞」を「不曾聞」とする。平仄の上では特に問題ないが、「未」と「不」では意味が微妙に変化する上、第二句にすでに「不可云」とうたわれているので、「不曾聞」では「不」の字が重複することになる。やはり「未」の方が穏当であろう。

なお清・馮舒はこの詩を「結欠緊健(結は緊健を欠く)、すなわち、結びにしまりが無い」と評している。中間の対句に重点を置く分、相対的に結びが弱いことは、四霊の律詩の欠点としてしばしば指摘されることであり、厳しい目で見るならば、趙師秀のこの詩も、その弊を免れているとは言いがたいようである。それでも、同じ作者の他の五言律詩と比較するならば、この詩が相対的に成功していることは否定できない。

なお、永嘉の四霊のうち趙師秀以外には、徐璣(一一六二～一一一四)が五言律詩「雁山」を、徐照と翁卷(生卒年未詳)が五言律詩「宝冠寺」を、それぞれ書いている。これらをも参照

え、自適の生活を送った。今日ではほとんど顧みられることのない江湖派の小詩人であるが、当時においては相当な詩名があり、永嘉の四霊と交わりを結び、理宗の紹定元年（一二二八）に五十一歳で世を去った。その詩集を『瓜廬集』といい、南宋・陳起『江湖小集』巻七十三、清・曹庭棟『宋百家詩存』巻二十三、『全宋詩』巻二九二〇（第五十六冊）に、それぞれ収録されている。⁽⁹⁾ また『宋詩紀事』巻六十九に簡単な紹介がある。薛師石は趙師秀より八歳年少であるが、交友の詩として、五言律詩「寄趙紫芝（趙紫芝に寄す）」、「会宿趙紫芝宅（趙紫芝の宅に会宿す）」、「送趙紫芝入金陵幕（趙紫芝の金陵の幕に入るを送る）」、「秋晚寄趙紫芝（秋晚 趙紫芝に寄す）」、七言律詩「戲贈趙天樂（戯れに趙天樂に贈る）」、七言絶句「懷趙紫芝（趙紫芝を懷う）」、五言古詩「寄題趙紫芝墓（趙紫芝の墓に寄せ題す）」を残している。また趙師秀にも「薛氏瓜廬」の他に五言律詩「薛景石（薛景石を辞す）」があり、これらの作品から、二人の親密な交友のさまがしのばれる。

「瓜廬」は、薛師石の号であると同時に、その隠居所の名前でもある。これは、前漢・司馬遷の『史記』巻五十三「蕭相国世家」に見える秦の召平の故事にちなむものである。該当する部分を次に示す。

召平者、故秦東陵侯。秦破、為布衣、貧、種瓜於長安城東、瓜美、故世俗謂之「東陵瓜」、從召平以為名也。

召平は、もとは秦の東陵侯であった。秦が滅んで、平民の身分となり、暮らしが貧しかったので、長安の城の東に瓜を植えた。その瓜が美味であったので、世の中の人々はこれを「東陵瓜」と呼んだ。召平によってその名がついたのである。

「東陵瓜」の故事は、魏・阮籍の「詠懷」其六にもうたわれている。⁽¹⁰⁾ その全体を次に示す。この詩は、『文選』巻二十三にも収録されている（十七首のうち第九首）。召平にちなみずから瓜廬と号した薛師石のこと、阮籍のこの詩も当然知っていたであろう。

昔聞東陵瓜	昔聞く	東陵の瓜
近在青門外	近く青門の外に在り	
連畛距阡陌	畛を連ね 阡陌を距て	
子母相鉤帶	子母 相い鉤帶す	
五色曜朝日	五色 朝日に曜 <small>ひび</small> き	
嘉賓四面会	嘉賓 四面より会す	
膏火自煎熬	膏火 自ら煎熬し	
多財為禍害	財多きは禍害と為る	
布衣可終身	布衣にて身を終うべし	
寵祿豈足頼	寵祿 豈に頼むに足らんや	

ついでながら、瓜廬があったという会昌湖について、『詠史

方輿紀要』卷九十四「浙江六」は、次のように解説している。

会昌湖、在府城西南。其上源曰郭溪、出鉄場嶺。又有雄溪、出城西南四十三里雄溪山。又有瞿溪、出城西南五十里瞿溪山。並東北流經鉄場嶺而東与郭溪会、繞流至城西南匯而為湖。湖受三溪之水、瀾漫城旁。起於漢晋間、至唐会昌四年太守韋庸重濬治之、因名。其近城西者曰西湖、在城南者曰南湖、実一湖也。湖支港甚多、其自城東南出南塘直抵瑞安江者、延袤蓋七十余里。

会昌湖は、「温州の」府城の西南にある。その源流を郭溪といい、鉄場嶺に源を発する。また雄溪があり、城の西南四十三里の雄溪山に源を発する。また瞿溪があり、城の西南五十里の瞿溪山に源を発する。いずれも東北に流れ、鉄場嶺を経て東で郭溪と合流し、めぐり流れて城の西南に至り、集まって湖となる。湖は三つの溪流の水を受け、城のかたわらに大きく広がっている。漢代から晋代の間起源を発し、唐の会昌四年（八四四。晩唐の武宗の年号）に至って太守の韋庸があらためて水底の泥をさらって深くしたので、それにちなんで（「会昌湖と」名づけられた。その城西に近いものを西湖といい、城南にあるものを南湖というが、実際には一つの湖である。湖は支流や港湾が大変多く、その城の東南から南塘を出てただちに瑞安江に至るものは、おそらく七十余里にわたって延々と続いていると思われる。

以下、詩の内容を聯ごとに解説する。まず、首聯「不作封侯念、悠然遠世紛」について。「封侯」は、功績により侯爵の地位を授かること。古くは『後漢書』卷四十七「班超伝」に、班超が自分の人相を見てもらったところ、「当封侯万里之外（当に万里の外に封侯せらるべし）」すなわち、万里の彼方で侯爵に封じられるであろう、と言われた、という話が見える。しかし趙師秀のこの「瓜廬」の詩の場合、班超もさることながら、前述の秦の「東陵侯」召平がより強く作者の念頭にあることは明白であろう。「封侯」の語の用例としては、この他にたとえば盛唐・王昌齡の七言絶句「閨怨」の、

忽見陌頭楊柳色 忽ち見る 陌頭 楊柳の色
悔教夫婿覓封侯 悔ゆらくは夫婿をして封侯をもと見しめし
を

や、また晩唐・曹松の七言絶句「己亥歲二首」其一の、

憑君莫話封侯事 君に憑ねがう 話す莫かれ 封侯の事を
一將功成万骨枯 一將 功成りて 万骨 枯る

などがあげられる⁽¹⁾。これらの用例では、「封侯」を求める（求めさせる）ことがいずれも否定的な文脈でうたわれているが、趙師秀のこの詩でも、薛師石の世俗の榮譽を求めようとしな

い、恬淡たる処世態度が賛美されている。また「悠然」の語は、東晋・陶淵明の五言古詩「飲酒二十首」其五に

採菊東籬下 菊を採る 東籬の下
悠然見南山 悠然として南山を見る

とあるのを想起させる。やはり世俗にあつて世俗を超越した隠士の境地をうたう名句である。

次に、頷聯「惟心種瓜事、猶被讀書分」について。この二句では、薛師石が瓜を栽培する生産労働に従事しながらも、知識人の本分である読書に励んでいることがうたわれる。類似の先例として、陶淵明の五言古詩「讀山海經（山海經を讀む）十三首」其一是

既耕亦已種 既に耕し 亦た已に種え
時還讀我書 時に還た我が書を読む

とうたい、また、南宋・陸游の七言絶句「小園」其一の後半は、その陶淵明をふまえてつ、

臥讀陶詩未終卷 臥して陶詩を読み 未だ巻を終えざるに
又乗微雨去鋤瓜 又た微雨に乗じて 去きて瓜を鋤く

とうたっている。いずれも、晴耕雨読の生活をうたうものである。趙師秀の詩もこうした田園詩の系譜に連なるものである。この他、永嘉の四靈の徐照にも「題薛景石瓜廬（薛景石の瓜廬に題す）」と題する五言律詩があり、その頷聯も、

自鋤畦上草 自ら鋤く 畦上の草
不放手巾書 放さず 手中の書

と、趙師秀の詩とほぼ同じ内容をうたっている。

ここで、第三句「惟心種瓜事」の平仄に注目したい。この句の平仄は「○○●●●」となっており、通常の「二四不同」の規格にはずれている。本来ならば、ここは「○○○●●●」となるべき所であるが、第三字と第四字の平仄が逆になっているのである。しかし王力著『漢語詩律学』第一章「近体詩」の第九節「平仄的特殊形式」によれば、こうした平仄の互換現象は唐詩にすでに見られ、宋詩において更に発展を遂げたものである。いわば定石化した許容範囲の破格であつて、特に目くじらを立てる必要はない。宋人の五言律詩の頷聯における同様の実例を、王力氏は全部で十三例あげている。参考までに、そのうち趙師秀の詩と完全に平仄が一致するものを、一例のみ次に示す。

○○●●●

楼台見新月 楼台 新月を見

○●●○○

灯火上双橋 灯火 双橋に上る

(北宋・賀鑄「秦淮夜泊」)

ところで、この二句の訓読は、基本的に小川環樹氏のものを踏襲した。第三句、散文ならば「唯応事種瓜」という語順になるはずであるが、律詩の奇数句の末尾に平字が来ては具合が悪いので、語順を転倒させたのであろう。詩歌の場合、こうした倒置はしばしば見られる。なお『宋詩紀事』は「事」を「日」とするが、これでは意味が通じにくい。やはり「事」とするのが妥当であろう。また第四句の「被」は受身を表す。

次に、頸聯「野水多於地、春山半是雲」について。この二句は、瓜廬から眺めた周囲の情景を描写する。瓜廬は会昌湖のほとりにあるため、見渡せば地面よりも水面の方が多い。そして、遠くにそびえる春の山々は、半ばが雲に隠れている。この二句は、先にあげた「雁蕩宝冠寺」詩の頷聯「流来橋下水、半是洞中雲」によく似ており、同工異曲と言ってよからう。この二句もまた、古来多くの文人が論評している。まず『瀛奎律髓』の方回は、この二句が中唐・白居易にもとづくものであることを指摘し、次のように言う。

「人家半在船、野水多於地」、本楽天仄韻古詩。今換一句為對、亦佳。

「人家 半ば船に在り、野水 地よりも多し」というのは、もとは白楽天の仄韻の古詩である。「趙師秀の詩は」今その一句を換えて対句としており、やはりすばらしい。

これに対して、清・查慎行は次のように反論している。

香山先有「人家半在船」句、故佳。此詩用此句無味。

白居易に「趙師秀より」先に「人家 半ば船に在り」という句があり、もとよりすばらしい。この「趙師秀の」詩はこの句を用いているが、味わいがいい。

方回と查慎行が言及している白居易の詩は、十六句から成る五言古詩「早秋晚望兼呈韋侍郎（早秋の晚望 兼ねて韋侍郎（一作御）に呈す）」（『全唐詩』卷四三三）の第三、四句である（ただし『全唐詩』は「人家」を「人煙」とする）。後半の「野水多於地」は、趙師秀の詩の第五句と完全に同じであり、それゆえ清・馮舒は、「五句直抄（五句は直抄なり）」、すなわち、第五句は（白居易の）そのままの抜き書きである、と批評している。一方、南宋・魏慶之の『詩人玉屑』卷十九に引かれる黄升の『玉林詩話』は、この句が晚唐・姚合によるものであると指摘する。

「瓜廬」詩云、「野水多於地、春山半是雲」、亦是姚合語也。

姚合「送宋慎言」云、「駢路多連水、州城半是雲」。

〔趙師秀の〕「瓜廬」の詩に、「野水 地よりも多く、春山半ばは是れ雲なり」とあるのは、やはり姚合の語〔に由来するもの〕である。姚合の「宋慎言を送る」詩に、「駢路 多く水に連なり、州城 半ばは是れ雲なり」とある。

引用されている姚合の句は、五言律詩「送宋慎言」（『全唐詩』卷四九六）の頸聯であるが、ただし『全唐詩』は後半を「州城半在雲」とする。

また明・胡應麟の『詩數』外編卷五「宋」は、次のように述べている。

宋末諸人学晚唐者、趙師秀「野水多於地、春山半是雲」、徐道暉「流来天際水、裁断世間塵」、張功父「断橋斜取路、古寺半関門」、翁靈舒「嵐蒸空寺壞、雪压小庵清」、世亦称之。然率浅近、不若惠崇輩之精深也。²⁾

宋末の諸人の晩唐を学んだものには、趙師秀の「野水 地よりも多く、春山 半ばは是れ雲なり」（薛氏瓜廬）、徐照（道暉）の「流れ来たる天際の水、裁断す 世間の塵」（題江心寺）、張鑑（功父）の「断橋 斜めに路を取り、古寺 半ば門を関ざす」（句）、翁卷（靈舒）の「嵐は空寺を蒸して壞し、雪は小庵を压して清からしむ」（石門庵）があり、世の人々もまたこれらを称賛している。しかしながら結局の所浅く卑近で

あり、「北宋の」惠崇ら〔の作品〕が精緻で深いには及ばない。

惠崇は北宋初の「九僧」の一人で、詩や画に巧みであった。北宋・蘇軾に七言絶句「惠崇の春江晚景」がある。

以上の諸家の評語は、趙師秀の詩句があるいは白居易に、あるいは姚合にもとづく指摘しながらも、方回を除けば、高く評価している者はほとんどいない。しかるに陳衍『宋詩精華録』は、この二句に「野水多於地、春山半是雲」と圈点を施し、

五、六何減石屏之「渡旁渡」「山外山」邪。上句似乎過之。

第五、六句は、どうして戴復古の「渡旁の渡」「山外の山」の句に劣ることがあろうか。「特に」上の句は、これをもしのごかのようなのである。

と特筆している。南宋・戴復古の句は、やはり『宋詩精華録』卷四に収録されているもので、「世事」と題する五言律詩の頸聯である。全体は次の通り。

春水渡旁渡 春水 渡旁の渡
夕陽山外山 夕陽 山外の山

『宋詩精華録』にはこの対句のみ「句」として収録され、や

はり圏点が施されている。

最後に、尾聯「吾生嫌已老、学圃未如君」について。この二句には、生産労働に従事し、晴耕雨読の生活を実践する薛師石に対する、趙師秀の讃嘆と羨望が込められている。

「嫌」は、その後の「已老、学圃不如君」の全体にかかっているであろう。自分（趙師秀）はすでに年若い、畑仕事を学ぶことが君（薛師石）に及ばないことが残念だ、というのである。「学圃」の語は、『論語』「子路第十三」に由来する。

樊遲請学稼、子曰、「吾不如老農」。請学為圃、子曰、「吾不如老圃」。樊遲出、子曰、「小人哉樊須也、上好礼、則民莫敢不敬。上好義、則民莫敢不服。上好信、則民莫敢不用情。夫如是、則四方之民、襁負其子而至矣、焉用稼」。

樊遲が、どうか穀物を作りたいと願った。孔子は、「私は老練な農夫に及ばない」と言った。「樊遲が」どうか野菜を作りたいと願った。孔子は、「私は老練な畑作りに及ばない」と言った。樊遲が退出すると、孔子は言った。「小人だな、樊須は。上の者が礼を好めば、民は尊敬せぬ者としてない。上の者が義を好めば、民は心服せぬ者としてない。上の者が信を好めば、民は人情を働かせぬ者としてない。そもそもこんな風であれば、四方の民は、その子供を背負つてもやって来るだろう。「それなのに」どうして穀物作りを学ぶ必要があるだろうか」。

ここで孔子は農作業について質問した弟子を「小人」と言っており、そのまま趙師秀の詩にあてはめると、趙師秀は薛師石を称賛しているように見えて、実は「知識人のくせに畑仕事に精を出しているなんて」とやんわり皮肉っている、という解釈も成り立つことになる。しかし、この詩をそのように解釈したのでは、折角の二人の友情を傷つけてしまうことになる。仮にそうした含みが込められているとしても、それはむしろ、二人がそうしたやりとりもできる気の置けない間柄であったことを物語るものと考えればよいであろう。なお『宋詩紀事』は「未」を「不」とするが、「雁蕩宝冠寺」の場合同様、第一句にすでに「不作」とうたわれており、「不如君」では「不」の字が重複することになる。やはり「未」とするのが穩当であろう。

清・紀昀はこの詩に対して

此首氣韻渾雅、猶近中唐、不但五六佳也。

この一首（「薛氏瓜廬」）は氣韻が円満温雅で、「風格が」中唐の詩に近く、ただ単に第五、六句がすばらしいというだけではない。

と、辛辣な批評で知られる彼にしては珍しく、肯定的な評価を与えている。「渾雅」は訳しにくい言葉であるが、要するにこの律詩が全体としてしっくり一つにまとまっており、円満で上

品な完成に達していることを言うものであろう。

なお、永嘉の四霊のうち趙師秀以外には、徐照と徐璣がそれぞれ五言律詩「題薛景石瓜廬〔薛景石の瓜廬に題す〕」を書いており、薛師石自身も五言律詩「瓜廬」及び「瓜廬至日即事」を書いている。紙幅の都合で、これらも紹介できないのが残念である。⁽¹³⁾

おわりに

ここに紹介した趙師秀の二首の五言律詩は、いずれもその作風を端的に物語る代表作である。「雁蕩宝冠寺」は山頂にある寺院をうたっており、「薛氏瓜廬」は、湖のほとりにある隠者の住居をうたっている。これらの詩は対照的な内容でありながら、形式や表現の上では一定の共通性も見られ、好一对をなしている。陳衍『宋詩精華録』が趙師秀の数ある作品の中からこの二首を選んでいるのは、妥当な選択であると言えよう。⁽¹⁴⁾ 決して気宇壮大な作品ではないが、端正な表現の背後に、洗練され、研ぎ澄まされた確かな美意識が感じられる。永嘉の四霊には、知られざる佳作がまだまだ多い。本稿が、彼らの作品世界を知るための、ささやかな手引きとなれば幸いである。

〔注〕

- (1) このため、清・厲鶚『宋詩紀事』は、趙師秀を他の三人とは別枠扱いにし、徐照、徐璣、翁卷の三人は巻六十三に、趙師秀は巻八十五「宗室」に、それぞれ収録している。
- (2) 比較的最近の宋詩選集の中では、金性堯『宋詩三百首』（一九八六年八月、上海古籍出版社）に収録されている。
- (3) もっとも、清・葉廷琯『吹網錄』巻五「夢溪筆談記雁蕩山」によれば、唐の開元二年（七一四）にはすでに太守の夏啓伯が雁蕩山を訪れ、石に名を刻んでいるという。梅原郁訳注『夢溪筆談3』（一九八一年十月、平凡社東洋文庫）十五頁、注（一）を参照のこと。
- (4) 清・曾唯『広雁蕩山志』巻二十二に収録された明・陸深「雁蕩図記」には、「有寺四、曰、古塔、凌雲、宝冠、石門」とあり、さかのばれば、宝冠寺は同山の四大名刹の一つであったことがわかる。
- (5) 趙師秀の「池上」詩については、『橄欖』第十四号（二〇〇七年三月、宋代詩文研究会）に掲載された拙稿「永嘉の四霊の七言絶句について」をあわせて参照のこと。
- (6) 原文は次の通り。……「宝冠寺」詩云、「流来橋下水、半是洞中雲」、用于武陵語也。武陵「贈王隱人」云、「飛来南浦水、半是華山雲」。……ただし『全唐詩』巻五九五は詩題を「贈王隱者山居 一作贈隱者」とし、また「水」を「樹」とする。
- (7) 原文は次の通り。……杜荀鶴「祇松松上鶴、便是洞中人」。此三四亦相犯、五六有味。……なお、杜荀鶴の「訪道士不遇」詩は、『瀛奎律髓』巻四十八「仙逸類」に収録されている。
- (8) 賈島「訪隱者不遇」……松下問童子、言師采藥去。只在此山中、雲深不知處。
- (9) 薛師石にはこの他に詞の作品として「漁父詞」七首があり、『全宋詞』に収録されている。

- (10) 同じ故事は、盛唐・李白の五言古詩「古風」其九にもうたわれている。……青門種瓜人、旧日東陵侯。富貴故如此、當營何所求。
- (11) 「封侯」の語は、南宋・陸游の「夜遊宮」詞及び「訴衷情」詞にも見える。『風絮』第三号（二〇〇七年三月、宋詞研究会）に掲載された龍榆生編選『唐宋名家詞選』訳注稿（三）を参照のこと。同詞の訳注は筆者が担当した。
- (12) 徐照の詩、『全宋詩』は「裁」を「截」とし、張鎡の詩、『全宋詩』は「半」を「未」とする。
- (13) 徐照の詩は領聯のみ紹介した。また翁卷には瓜廬の詩はないが、薛師石には翁卷との贈答の詩が二首あり、やはり交友があつたことが確認できる。
- (14) 『宋詩精華録』は、趙師秀の作品として五言律詩「雁蕩宝冠寺」「薛氏瓜廬」及び七言絶句「数日」「約客」の合計四首を収録している。このうち二首の七言絶句は、錢鍾書『宋詩選注』にも収録されている。詳細は宋代詩文研究会訳注『宋詩選注4』（二〇〇五年四月、平凡社東洋文庫）を参照のこと。同詩の訳注は筆者が担当した。